

## 立山芦峯寺の「佐伯武平」と両澤山大慶院（新潟県十日町市） —芦峯寺の媯尊と大慶院の大日姥婆尊の関係をめぐって—

細木ひとみ

### はじめに

芦峯寺集落に祀られる媯尊は、「おんばさま」と呼ばれ、集落の人々に大切にお祀りされている<sup>(1)</sup>（写真1）。近世期につくられた縁起類などには、媯堂に本尊3躰とその両脇に当時の日本の国の数である66躰が祀られていたと記されている。しかし、明治初年の神仏判然令により、媯堂は破却され、現在では14躰が残るのみである<sup>(2)</sup>。そのうちの1躰の像底部に「永和元年六月日 式部阿闍梨□□」と記された墨書銘がある（写真2）。これにより、少なくとも永和元年（1375）には媯尊が芦峯寺で祀られていたということがうかがえるが、当時どのように祀られていたのか、誰が祀っていたのかなど、まだまだ不明なことが多い。



写真1 芦峯寺の媯尊坐像（媯堂の御本尊とされる3躰）

平成29年度（2017）に開催した前期企画展「うば尊を祀る」では、この芦峯寺集落での媯尊信仰と、その信仰の広がりについて紹介した<sup>(3)</sup>。その中で、特に気になったのが、新潟県十日町市新座にある両澤山大慶院との関わりである。しかし、大慶院の御本尊の「大日姥婆尊」と立山芦峯寺の媯尊が関わる話が伝わっているものの、縁起などはなく、詳細なことは紹介できなかった。

そのような中で、令和3年（2021）4月に芦峯寺集落の「佐伯武平」（武兵衛）氏宅から「家の物を処分する」という話を伺い、訪ねたところ、「佐伯武平」氏宛に大慶院住職の「中川光忍」氏より送られた昭和27年（1952）の手紙2通とハガキ1枚、昭和31年（1956）の手紙2通とハガキ2枚を発見した。この時の「佐伯武平」は「佐伯武森」氏のこと、明治10年（1877）3月21日生まれであるから、昭和27年には75歳であったとみられる。

そこで、本稿では「佐伯武平」氏に送られたこの4通の手紙と3枚のハガキの紹介とともに、新潟県十日町市の大慶院と芦峯寺との関わりを探る手がかりにしたいと思う。



写真2 像底部にある墨書  
（写真1の中央の媯尊）

### 1. 両澤山大慶院の大日姥婆尊

新潟県十日町市新座に所在する大慶院は、その開基について、平安時代初期、役行者から8代目の国珍大僧正が祖師の靈感をいただき、出羽の国・羽黒山を開闢（開山）しようとして北国へ下向したが、その途中にこの地に留まって衆生を教化したが、出羽国へ旅立つにあたり、懇望されたので同道していた弟子の珍教阿闍梨に捧持仏不動明王をあたえ、大同元年（806）に珍教阿闍梨が伽藍を造営したのが始まりだというのである。そして、修験密教を相伝し、本山修験・聖護院門跡派の越後の中心道場として布教につとめ、明治維新後に天台宗に帰属したという。

この大慶院の御本尊である「大日姥婆尊」に立山芦峯寺の媮尊と関わる伝承があり、昭和31年(1956)に中川光忍住職がまとめた大慶院発行の案内パンフレットには、次のように紹介されている（傍線は加筆、写真3）。

承德元年（一〇九七）中興開山了善和尚の時、当時の檀当石原道仙は、ある夜、靈夢をみたのであります。靈夢のうちに恐ろしい老婆が現れ「我はこれ冥府三途の河の辺に住む奪衣婆なり。外には極悪忿怒の相を現しているが、本地は大日如来にして大慈悲心を以て衆生を済度す。千歳の昔、越中の国立山へ五穀と麻の種をもって天降り、之を世に広め一切衆生に食物と衣服を与えて生長せしめ、仏法僧の三宝を知らしめ、終には寂滅の本土に帰する因縁を知らしむ。永く立山に鎮座して衆生を済度し来りしが、汝が善根誠に殊勝なり、殊に当地は仏法流布の靈地なればこの地に来りて衆生を済度せん」とす。汝が日頃信仰いたせる了善和尚と同道し、立山へ登り我が尊像を此地に移し、勸善懲惡の因果を衆生にらしむべし。」と告げ、光明輝く大日如来の御姿となり彷彿として消え給うたのであります。

道仙は不思議に思い靈夢の次第を了善和尚に語りましたところ、前世の結縁ならん急ぎ同道いたしましたしようと、兩人立山の芦くら寺に至りこの靈夢のことを物語りましたところ、不思議にも芦くら寺の別当にも同じ御示現があったと、互いに靈夢の符号せるは誠に姥婆尊の御奇瑞の事である。早速御佛を送り奉らんとて姥婆如来三体のうちの一体を授かり、当地に遷座したのであります。また、新たに姥婆如来の台座を作って安置したことから、村名を山本から新座と改称したのであります。現在、本尊佛として安置されていますのがこの姥婆尊であります。

と記されている。



写真3 大慶院発行の案内パンフレット



この大慶院発行の案内パンフレットの内容をまとめると、

- (1) 承德元年（1097）、檀当・石原道仙の夢に恐ろしい老婆が現れて、「我はこれ冥府三途の河の辺に住む奪衣婆なり」と名乗り、本地は大日如来だと語っている。
- (2) この奪衣婆は、越中の国立山へ五穀と麻の種をもって天降り、これを世に広め、一切衆生に食物と衣服を与えて生長させ、仏・法・僧の三宝を知らせしめ、ついには「寂滅の本土」に帰する因縁を知らしめたという。そして、ながく立山に鎮座して衆生を済度（仏や菩薩などが迷い苦しむ衆生を救い、悟りの世界に渡し導くこと）してきたが、石原道仙が善根で殊勝なうえ、当地（十日町市新座）は「仏法流布の霊地」なので、この地に来て衆生を済度したい。了善和尚と一緒に、立山へ登り、「我が尊像」をこの地に移し、勧善懲悪の因果を衆生に知らせるべしと告げた。
- (3) 石原道仙は、了善和尚と立山芦峯寺に来て、霊夢について語ったところ、芦峯寺の別当にも同じ御示現があり、「姥婆尊の御奇瑞の事」と姥婆如来3体のうちの1体を授かり、遷座した。

というのである。つまり、大慶院の御本尊の「大日姥婆尊」像は、平安時代後期に檀当であった石原道仙の見た夢に現れた「老婆＝奪衣婆」の語ったことで、立山の芦峯寺から勧請したとされている。ただし、「はじめに」でも紹介したように、年紀が記された縁起や史料はなく、いつごろから伝えられている話なのか、詳細はわからない<sup>(4)</sup>。

それでも、芦峯寺の媯尊については安永8年（1779）以降の縁起や勧進記に、「御本尊は三体、左手に五穀を納め、右の手に麻の種を執持している」と記されているので、大慶院発行の案内パンフレットに「立山へ五穀と麻の種をもって天降り」と記されているのも、また「姥婆如来三体のうちの一体を授かり」と記されているのも、芦峯寺の宿坊家が布教勧進活動の際に用いた縁起や勧進記の影響を受けていると考えられる。

ところで、大慶院の御本尊「大日姥婆尊」像は秘仏であり、33年に一度の御開帳でのみ、その姿を拝むことができる（写真4）。



写真4 大日姥婆尊像（平成30年御開帳時のお姿）

近年の「大日娑婆尊大開扉」は、平成30年（2018）9月8日（土）と9月9日（日）で、9月8日（土）の午後3時より御本尊の大日娑婆尊像の御開帳（大般若・大護摩供修法）、9月9日（日）の午前9時30分より中川玄祐和尚の晋山式、午前10時より火生三昧（火渡りの儀）が行われた（写真5・6）。33年ぶりの開催のため、この時の式次第は昭和60年（1985）に行った御開帳を参考にしたという。

大日娑婆尊像は高い位置にある厨子の中に祀られており、御開帳にあたって右の指には善の綱が結ばれ、その綱は本堂前の回向柱と結ばれていた（写真7）。頭から脚まで白布をまとっているため、体部分や脚の部分がどのような造形なのかは不明だが、いただいた御本尊の護符がその姿が参考になる（写真8）。しかし、平成30年の御開帳では「立山から勧請された娑婆尊」という話は紹介されず、地元の方でも立山との関わりを知らない方もいた。



写真5 平成30年御開帳（堂内）



写真6 火生三昧（火渡りの儀）



写真7 本堂前の回向柱



写真8 娑婆尊の護符



## 2. 佐伯武平宛の昭和27年の手紙

大慶院の中川光忍住職が手紙やハガキを送った「佐伯武平」の家は代々神職を勤めており、芦峯寺の五社人家の一つと考えられる。享和元年（1801）以降の絵図と考えられる「芦峯寺高割山草高并御寄進高絵図」（個人蔵）には芦峯寺集落の宿坊家33軒と社人家5軒が記されているが、そこにも「武平」としてその名が記されている。手紙を受け取った佐伯武平氏（武森氏）は神官の資格は取持していなかったが、父親の武曲氏は神官として活躍した人物である。

昭和27年（1952）に佐伯武平氏へ宛てた手紙2通とハガキ1枚のうち、1番古い消印が昭和27年8月14日に書かれたものである（写真9）。



写真9 昭和27年8月14日の手紙

まず、初めの挨拶で「先般訪芦の際は色々御世話になり有難う御座いました」と記されていることから、この手紙が出される前に中川住職が芦峯寺へ訪れており、その時に佐伯武平氏がお世話をしたことがうかがえる。そして、その際立山寺の御住職佐伯秀胤師より御来越願ふ様に約束して参りましたので別紙の様なポスター迄送って宣傳してみますがその後立山寺へ再度御手紙にて御返書を願ってゐるのですが未だに通信なく途方にくれて居ります。計画もせねば小生の立場もなく困って居ります。就ては貴殿より立山寺にお伺いの上是非共御来越下さる様お話し下され、諾否の程至急御返書賜り度く御願ひ申し上げます。

とあり、この手紙の1番の目的は、芦峯寺へ訪れた際に芦峯寺の立山寺住職・佐伯秀胤氏に大慶院へお越しいただける約束をしているがその後返事がなく、困っているため、佐伯武平氏に立山寺に伺って大慶院へお越しいただけるか否かの返事をいただききたいというお願いである。「別紙の様なポスター迄送って宣傳してみます」や「計画もせねば小生の立場もなく困って居ります」とあるのは、手紙と一緒に大切に保管されていた「昭和27年」と記された「嬭婆尊開帳回向袋」（写真10）やパンフレット類から、昭和27年



写真10 昭和27年の嬭婆尊開帳回向袋

に行われた33年に一度の「大日嬭婆尊御開帳」のこととみられる。芦峯寺の立山寺の佐伯秀胤住職は芦峯寺泉蔵坊の子孫で、泉蔵坊家は明治期になって無住となっていた富山市梅沢町の円隆寺の住職となり、芦峯寺には越中立山寺を創立した家である。円隆寺住職であった佐伯秀胤氏は、立山講社の活動に関わった人物であり<sup>(5)</sup>、芦峯寺閻魔堂での行事を執り行っていた人でもある。明治36年（1903）生まれというから、昭和27年は49歳である。この後に届いた昭和27年8月26日のハガキには、「翌々日立山寺様より書面を戴き恐縮いたしました」と佐伯秀胤氏より返事があったことと、佐伯武平氏に9月3日に立山寺様（佐伯秀胤氏）

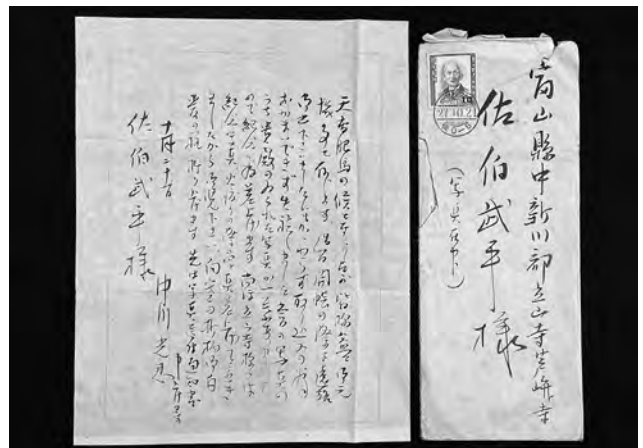


写真11 昭和27年10月21日の手紙

と一緒に参加してほしいと誘っている。

もう1通は、昭和27年10月21日の消印がある手紙である（写真11）。こちらには、「過日開帳の際は遠路御出で下さいましたにもかかわらず取り込みの為おかまいできず失礼しました。当方の写真のうち貴殿のみられた写真一葉ありましたので記念の為差上げます。尚ほ立山寺様には記念写真、火渡りの際の写真差上げて置きましたから御覧下さい」と記されている。一緒に送られてきた写真の裏にも、

新潟縣中魚沼郡中条村新座  
大慶院 中川光忍  
姥婆尊開帳式年祭

昭和二十七年九月四日

佐伯武森 七十五歳

と記されているので、佐伯武平氏も佐伯秀胤住職とともに昭和27年の「大日姥婆尊大開扉」に出席したようである（写真12）。

また、佐伯秀胤住職においては、昭和60年（1985）9月の十日町タイムス社の記事に、御開扉記念事業は、越中立山寺（姥婆尊伝来寺院）から齊木秀胤大僧正を本山特使として招き七日は大般若大護摩修法、奉納芸能大会、八日は稚児行列、晋山式、火生三昧（火渡り）が行われる。とあり、33年後の昭和60年9月7日と8日に行われた「大日姥婆尊大開扉」にも出席したのがわかっている<sup>(6)</sup>。

これらの手紙から、少なくとも昭和27年には芦峯寺の佐伯武平氏や佐伯秀胤氏と大慶院の中川光忍住職に関わりがあったことがうかがえるのである。



写真12 大慶院から送られたきた写真(昭和27年)



佐伯 武平(武森)氏

### 3. 佐伯武平宛の昭和31年の手紙

次に発見したのが、昭和31年（1956）の手紙2通とハガキ2枚である。

大慶院の中川光忍住職が、昭和31年7月16日に書いた手紙（下線は加筆、写真13）には、



昨秋末田村啓松様発起人となり当院信者のうちに立山講中が組織されました。講員四十数名ですが大体三年計画にて三年間のうちに講員全部抽籤にて登拝することになり今夏第一陣を送りたいと思っております。然し田村様も小生も其の他の講員も立山へ登山したことはあ利ませんので勝手が分らず困っております。就きましては立山登山の心得とでも申しませうか服装、雨具の種類、衣類の用意、食料等の携帯、履物の種類、其の他の持参物御きかせいただければ幸甚て存じ 御照会いたします。貴地または山麓へ泊る（十四、五人位）旅館等ありませうか。山上には山小屋がある由なれば立山寺へでも照会して便宜を計ってもらいます。

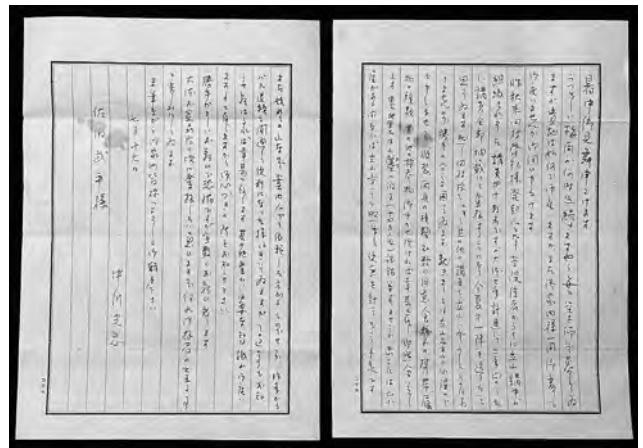


写真13 昭和31年7月16日の手紙

また初めての山なので案内人でも依頼した方が良いでしょう。昨年バス道路も開通して便利になった様に聞いてみますがその辺の事もお知らせ願はれば幸甚と存じます。其の他登山に必要な知識が御座います事と存じますから御心づきの所をお知らせ下さい。勝手にましいお願ひで恐縮ですが宜敷お願ひ致します。

と記されている。

大慶院のある新座地区の立山講については、平成29年（2017）度前期特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書<sup>(7)</sup>でも紹介しているが、昭和50年代の立山講に参加した方から伺ったお話では、35年ほど前までは立山講があったという。さらに、次のようなお話も伺った（話者：昭和22年（1947）3月生まれ）。

自分が35歳くらいのときに、「立山講」で立山に参拝した。大慶院は山伏の寺で檀家がおらず、「講」というので毎月積み立てをしていた。

「立山講」は、立山（雄山）に参拝するのが目的の講であり、立山参拝は毎年やっていたと思う。この頃は、この辺りでは庚申講も盛んに行っていた。立山に出かける前に大慶院で宴会をした。8月20日前後に行っていたと思う。大型バス一台で、2泊3日で行っていた。参加者は、一軒1人で、40人くらい。「講中」というより、大慶院を中心とした仲間の集まりという感じだったので、個人の都合で参加・不参加があった。ほとんどが新座集落の人であったが、町の人もいたし、女性もいた。

まず室堂で一泊し、雄山に参拝し、ご来光を拝んだ。参加したところは70代の人が多かったので、山に登らず、室堂で待っているという人もいた。室堂まで下山し、ご飯を食べるときに「天神囃子」を唄ってからお土産と一緒に室堂でお札をもらったと思う（この辺りではお祝いがあると「天神囃子」を唄う）。2泊目は宇奈月でトロッコに乗ったりした。

帰ってくると、「はっばきぬぐ」といって宴会をした。「はっばき」（脚にぐるぐる巻いたもの）をぬぐという意味であった。

というのである。平成29、30年（2018）に行った調査時には詳細がわからなかったが、昭和31年7月の佐伯武平氏に宛てた手紙に「昨秋末田村啓松様発起人となり当院信者のうちに立山講中が組織されました」とあり、昭和30年（1955）の秋に講員40数名で立山講中が組織されたことがわかる。

そして、消印は見えないが、内容から昭和31年の8月のものだとみられるハガキには、

立山登山、今来は十四、五名にて十九日朝六時五十分当山着列車にて登拝する事に決定いたしました。何卒宜敷くお取り計ひ下され度お願い申上ます。御山案内下さる由何より有難いことと田村様始め一同感謝いたしてあります。何れお拝眉の上万に御禮申上度く楽しみにしてあります。先は右御願ひ込申上ます。とあることから、8月19日の朝に立山へ到着する列車で向かうことを知らせており、先述した手紙の通り、

昭和31年の夏に第1陣が立山登拝にやってきている。そして、8月23日のハガキ（写真14）では、

今般立山登拝の節は御老体にもかかわらず、山上近わざわざ御案内下され有難く存じて居りましたのに結構なる御土産迄御恵与下され厚く御禮申上ます。十九日は皆、相当な疲れを感じて居りましたが、廿日は一同無事に、しかも元気で地獄谷の偉観を見物し下山いたしました。途中、宇奈月温泉に一泊いたし、廿一日夕刻一同恙なく帰宅いたしましたから、憚りながら御休心ください。

と記されており、8月19日、20日で立山登拝を行い、宇奈月温泉で一泊してから帰宅して旨を報告している。しかも、「御老体」と記されているが、佐伯武平氏はこの時79歳であったが山上の近くまで案内して行ったようである。

さらに、昭和31年10月29日の手紙（下線は加筆、写真15）には、立山登山の旨は本当に御厄介様に相成り深謝いたしてします。立山連峰には幾度か寒も見られてると存じます。今はなつかしい思い出で御座います。（中略）今朝田村啓松様宅へ御伺いし御書面の趣き申し伝いました処、登山より帰宅以来多忙に紛れ令状も差上げず失礼しているが記念盃は確かに三ヶ頂戴し（小生は一の越立山荘にて頂戴いたしました）帰宅して御本家へ一ヶ御貴殿より贈り物としてお届けし一ヶは自らの家宝として保存してみると申し大変恐縮してみました。早速御書面差上げる由申して居りました。

当院にては同封印刷物の様に開創一、一五〇年御遠忌を記念し茅葺家根を垂丹葺屋根に改築する様計画されました。当院の来歴姥婆尊の因縁等記し信仰を新たにしていきたい考へです。由緒に富んだ芦峯寺の昔の盛歎を思い出す時感慨無量なものがあります。御ついで節立山寺御住職様へ一部差し上げて下さい。何卒御住職様へも宜敷くお伝へでされ度お願い申し上げます。

と記されている。お礼とともに、開創1,150年御遠忌を記念し、茅葺屋根の改築を計画していることと、因縁等を記して信仰を新たにしていきたいと述べている。この「当院の来歴姥婆尊の因縁等記し」とあるのが、第1章で紹介した大慶院発行の案内パンフレットとみられる。

おわりに

江戸時代の芦峯寺嬬尊は、「布橋灌頂会」を中心に女性からの信仰を集めており、加賀藩からの御普請所の一つでもあった。それが、明治初年の神仏判然令で大きく変化することとなる<sup>(8)</sup>。

明治2年（1869）3月、端裏書に「寺社奉行江（へ）」、包紙に「姥堂等仏閣御廃止之押」と記されている史料（芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財）では、金沢藩より、立山権現を雄山神社と改め、芦峯寺・岩峯寺の衆徒を復飾させ神勤めを仰せ渡し、仏像や嬬堂等の建物を取り払うように命じられた。そして、同

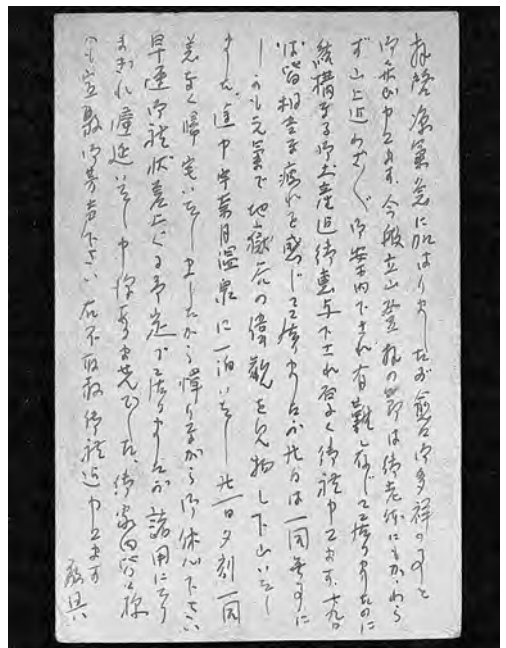


写真14 昭和31年8月23日消印のハガキ

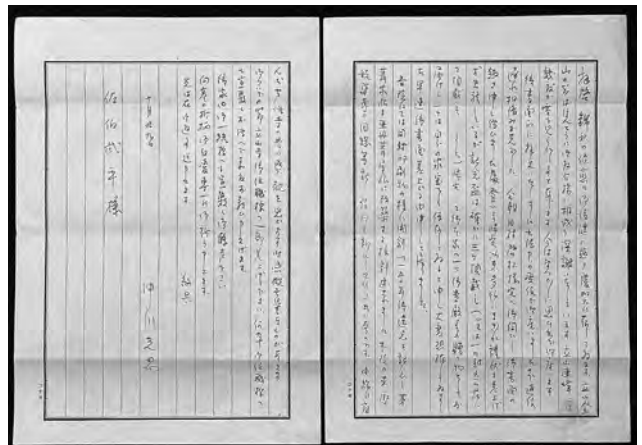


写真15 昭和31年10月29日の手紙



年3月28日に金沢藩の寺社奉行、多賀左近より立山芦峯社人中に出された文書では、衆徒らが復飾するにあたり、自らの手で媯堂、閻魔堂、帝釈堂、講堂を取り払うように命じられている。最終的には、講堂は祈願所として残っている。そして、閻魔堂も佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』<sup>(9)</sup>で、「僅かに炎魔堂だけが残された。いや残されたのではない。芦峯に寺が無くなって、彼是と都合が悪いので、村の老人等の集いの場にして愚図々々している中に、取り払いが遅れ、廃仏毀釈の官風が消えたので、そのままになってきたのである」と述べており、また「集落に一番近いところにある」との理由で破却を免れたとも伝わっている。結局はこの後、媯堂は破却された。

その後、芦峯寺の媯尊については『立山信仰の源流と変遷』<sup>(10)</sup>に「明治維新の廃寺の際は本尊三体は開山堂の脇壇の左右に移され、一山によって奉祀されてきたが昭和十五年国幣社昇格の際、一時一山の手で善道坊に預けられたが、終戦後、更に炎魔堂に移されて・・・」とあり、本尊とされる媯尊3軀は、開山堂から閻魔堂へと移されたことがわかる。開山堂に移された後の詳しい史料はないが、『一山社年中議事録』（芦峯寺一山会蔵）の昭和15年（1940）10月14日の記録に、

開山堂内ニ安置シて有りシ旧姥堂本尊三体、御治国仏像二体、坐像不動明王一体、計六体村方へ寄附する事

とあり、芦峯寺一山会から村方へ寄附されたことにより、終戦後、閻魔堂へと移されたようである。昭和20年代後半からは、芦峯寺地区の婦人会（現在は、芦峯女性の会）が引き継ぎ、お祀りしている。

昭和50年代に大慶院の立山講に参加された方の話では、「立山講の立山登山は芦峯寺媯尊へお参りすることを目的としていたわけではなかった」という。大慶院の大日姥婆尊と芦峯寺との関わりについてはまだまだわからないことが多いが、少なくとも昭和27年には芦峯寺の佐伯武平氏や佐伯秀胤住職と大慶院の中川光忍住職に関わりがあり、昭和27年（1952）9月に行われた大慶院の「大日姥婆尊大開扉」にも招待されている。そして、昭和60年9月の「大日姥婆尊大開扉」にも佐伯秀胤住職は招待されているのである。さらに、大慶院で昭和30年（1955）秋に立山講中が結成されたことも知ることができた。両者の関係にはついては課題も残るが、今後は佐伯武平家についても調査していきたいと思う。

#### 【付記】

本稿は、平成29年度特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書をもとに、新たにわかったことを加筆したものである。

本稿作成にあたっては、青木睦美氏と佐伯哲也氏よりご協力いただきました。また、平成29年と30年の調査は、加藤基樹氏と行いました。ここに記して皆様に御礼申し上げます。

#### 【註】

- (1) 芦峯寺集落のうば尊は、「媯尊」と書く。「媯」の字は、佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』で「姥と田を三個重ねた字は、芦峯の嶺の字と同様に、大辞典にも見当たらない。結局、立山衆徒独特の作り字であるらしい」と述べているように、芦峯寺集落以外では使用されていない独特な字である。
- (2) 現在は、芦峯寺閻魔堂に6軀、立山博物館常設展示室に8軀ある。すべて芦峯寺閻魔堂所蔵で、うち5軀が富山県指定文化財。
- (3) 平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成29年7月15日刊）。
- (4) 大慶院については、『新座の里』（新座新興会、平成3年3月刊）にも掲載されている。
- (5) 平成30年度後期特別企画展「立山の明治維新」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成30年9月15日刊）他、参照のこと。
- (6) 註（3）に同じ。
- (7) 註（3）に同じ。
- (8) 細木ひとみ「明治期の媯堂破却と媯尊への信仰」（平成30年度後期特別企画展「立山の明治維新」展示解説書所収、富山県 [立山博物館]、平成30年9月15日刊）。
- (9) 佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年9月15日刊）。
- (10) 註（9）に同じ。